



発行:NAED 一般社団法人地域づくり支援機構 発行日:2023 年 8 月 1 日

- ◇一般社団法人 地域づくり支援機構 2023 年度定時総会の報告……1 頁
堀越正夫(地域 P&C 第 3 期生/専務理事・事務局長)
- ◇第 15 回 NAED 地域づくりシンポジウムの開催報告……2 頁
原田弘之(地域 P&C 第 2 期生/理事/地域 P&C 養成塾運営委員)
- ◇殿川の地域発展、その後 吉村耕治(地域 P&C 第 7 期生)……4 頁

一般社団法人 地域づくり支援機構 2023 年度定時総会の報告

堀越正夫(地域 P&C 第 3 期生/専務理事・事務局長)

去る 6 月 3 日(土)、今井地区公民館(講堂)において、「一般社団法人地域づくり支援機構 2023 年度定時総会」を開催いたしました。以下のとおり総会は成立し、議案は決議されましたので、ご報告を申し上げます。

1. 総会の成立

総会は、正会員 67 名に対して、出席会員数 39 名(本人出席 17 名、委任出席 22 名)と過半数の出席により成立いたしました。

2. 総会議案議決について

①第 1 号議案:2022 年度事業報告並びに収支決算承認の件

本件は、原案どおり承認可決されました。

②第 2 号議案:2023 年度事業計画並びに収支予算承認の件

本件は、原案どおり承認可決されました。

③第 3 号議案:役員選任の件

本件は、原案どおり承認可決されました(下表参照)。

役職名	氏名	資格	備考
理事長	村田 武一郎	地域プランナー・コーディネータ	奈良フェニックス大学学長
副理事長	井ノ本 直三	地域プランナー・コーディネータ	
専務理事	堀越 正夫	地域プランナー・コーディネータ	事務局長
理事	野口 隆	地域プランナー・コーディネータ	奈良学園大学特別客員教授
理事	大塚 徹	地域プランナー	渉外部長
理事	北森 義卿	地域プランナー・コーディネータ	
理事	吉田 遊福	地域プランナー・コーディネータ	
理事	今西 弘子	地域プランナー・コーディネータ	
理事	若林 稔	地域プランナー・コーディネータ	地域 P&C 養成塾塾長
理事	中谷 みさこ	地域プランナー・コーディネータ	
理事	神 剛司	地域プランナー・コーディネータ	地域 P&C 養成塾委員
理事	中辻 孝之助	地域プランナー・コーディネータ	地域 P&C 養成塾委員
理事	吉井 辰弥	地域プランナー・コーディネータ	
理事	原田 弘之	地域プランナー	地域 P&C 養成塾委員
理事	立松 麻衣子	地域プランナー・コーディネータ	地域 P&C 養成塾委員
監事	高岡 宏芳	地域プランナー	
監事	村上 秀夫	地域プランナー・コーディネータ	
顧問	木村 衛	地域プランナー・コーディネータ	
顧問	石井 重徳	地域コーディネータ	

なお、金原薫理事、笹野 義一監事が退任されました。新理事として立松 麻衣子氏、新監事として村上秀夫氏が就任されました。

2023 年度以降の事業については、現役員はもとより、新しく役員となられた立松麻衣子理事のご協力のもと運営していく予定です。会員の皆さまにおかれましては、ご参画・協力をよろしくお願い申し上げます。

3. 事務局、地域 P&C 養成塾の体制

事務局、地域 P&C 養成塾は、下記の体制となっております。よろしくお願い致します。

項目	メンバー
事務局	事務局長兼会計:堀越正夫 事務局次長:中辻孝之助 渉外部長:大塚徹 広報担当:東千恵子、布川拓海
地域 P&C 塾	塾長:若林稔 運営委員:神剛司、中辻孝之助、原田弘之、立松麻衣子、城者定史、山中淳史

4. 地域P&C(第15期)の認証式

総会終了後、地域P&C(第15期)の認証式が行われ、7名の仲間が誕生しました(なお、絹野晋之助氏は、東京転勤により欠席でした)。シンポジウムにおいて、彼らの活動報告が行われました。



左から、村田理事長、新地域P&Cの増田雄也氏、辻元亨介氏、村田浩之氏、中村倫子氏、澤智実氏、山中淳史氏、神運営委員(絹野晋之介氏の認定証を代理受領)、若林塾長

第15回 NAED 地域づくりシンポジウムの開催報告

原田弘之(地域 P&C 第 2 期生 / 理事 / 地域 P&C 養成塾運営委員)

去る6月3日(土)の午後に、橿原市の今井地区公民館において「第15回 NAED 地域づくりシンポジウム」を開催しました。その開催結果について報告します。

本シンポジウムは、当期の地域 P&C 養成塾の集大成としての卒塾プログラムで、15 期生が中心となって、企画・準備と当日の運営を行いました。約 50 名の参加者がありました。ご参加及びご支援いただいた皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

タイトルは「Helz(ヘルツ)に火を灯せーアフターコロナがつなげた地域づくり・コロナを乗り越えてー」ということで、ヘルツはドイツ語で「心」を意味しており、塾生たちが1年間の活動を通じて得た、地域づくりに向けた発信したいメッセージとなっています。

1. 基調講演

養成塾の5期生であり、大阪ECO動物海洋専門学校副校長の城者定史氏より、「海と森とのつながり 豊かな海を未来につなぐ挑戦！」というテーマで講演いただきました。地域連携の実例を交えたとても興味深い内容で、奈良県と大阪湾、私たちと海や地球がつながっていることをわかりやすく教えていただきました。

2. 奈良フェニックス大学の活動紹介

奈良フェニックス大学学長であり、NAED理事長である村田武一郎氏より、「奈良フェニックス大学の概要と盛年による地域づくり」と題した活動紹介がありました。

3. トークセッション

地域P&C養成塾の学び舎が今井町の阿伽陀屋若林亭であるほか、15期はコロナ規制も緩和される中で、今井灯火会でのボランティア活動、今井町並み散歩における地域からの出店など、今井町での活動が充実していた



こともあり、若林塾長がコーディネータ役を務め、塾生がパネリストとなるトークセッションを行いました。塾生からは現場から学んだことや取組みを通じた課題、人との出会いの中で自分が成長したことなどの感想や意見が出されました。

4. 個別発表

地域P&C養成塾15期生から、塾での1年間の経験や検討を踏まえ、自身の今後のあり方や取組み提案などについて発表を行いました。それぞれ个性的で情熱あふれるプレゼンテーションにより聴衆を惹きつけ、質疑応答や講評も活発に行われました。

○辻元亨介「山添村を歩く～地域の医師と見つめる故郷の宝～」

○増田雄也「知らない気が付いた『地元食材の魅力』」

○澤智実「山添村 東豊ベース『茶の実オイル研究所』の活動」

○山中淳史「なんでかわかるか?プロジェクト」

○村田浩之「今の私のままで○」



5. 舞踊

塾生の村田氏のつながりにより、香芝市の授産施設で働く障がい者により構成される「いわき舞踊会」の皆さんによる踊りの披露がありました。15回を数える地域づくりシンポジウムの中では初めての取組みになりました。「今の私のままで○、あなたと出会って◎」というメッセージは多様な人々による地域づくりにおいて最も大切な考え方だと思います。

殿川の地域発展、その後

吉村耕治(地域P&C 第7期生)

1. コロナ5類移行後の今と3年前を振りかえる

私の前回の投稿は、NAED 通信 No.20(3年前の2020年5月1日号)であった。この時の巻頭言で、村田理事長が「続日本紀」から奈良時代の天然痘の流行を伝える部分を引用されていたのは、まだまだ記憶に新しい。

思い起こせば、ちょうど全国で緊急事態宣言が出され、買いために、最寄りの大宇陀のスーパーマーケットでさえ、お米や小麦粉が棚から姿を消していた。テレビは連日、おどろおどろしい新型コロナウイルスの拡大写真を映し出し、感染力の強さや各地の状況を何度も何度も繰り返し伝えていた。一方、ラジオはテレビのようにひどく恐怖心をかき立てることはなく、トークや音楽が流れていたのであった。

ちょうどその頃、不要不急の外出自粛が叫ばれる中、歌手吉幾三氏が歌う「おら東京さいぐだ」の替え歌(殿川 ver.)を作っていたのをここで披露したい。殿川とは私自身が住む、吉野町内の一集落の名称である。

マスクがねえ 薬屋ねえ 宅配一日一度だけ
電車もねえ コンビニねえ 道路は山ん中ぐーぐる
猪鹿鳥(いのしかちょう) ゲームじゃねえ 畑にや囲いが必須です
カラオケねえ ファミレスねえ バスに乗るなら要予約
俺ら殿川さいるだ 俺ら殿川さいるだ
コロナ済んだら マスクを取って 開拓村で再開拓するだ

街灯(あかり)がねえ 4Gつかめねえ クルマはほとんど走ってねえ
ブロードバンド来てるから テレワークはへっちゃらさ
ポスティングねえ ウーバーねえ たまに来るのはガス交換
米だけは きらせねえ 災害来ても生きてける
俺ら殿川さいるだ 俺ら殿川さいるだ
コロナ済んだら マスクを取って 開拓村で再開拓するだ

補注: 大手による4G通信は docomo が盤石、他4社はほぼ使えないと思って良い。

今こうして改めて歌詞を見てみると、マスクがない、テレワーク、都会では大活躍のウーバーなど、あの頃の殿川の生活と社会の状況をよく表していると言える。

ちなみに、2022年春には、それまで要予約だった殿川発着のコミュニティバス(路線バス)が廃止となり、デマンドバスの仕組みがスタートした。それにより、これまでの吉野病院発着が中心となった路線に縛られることなく、町内に設置されているバス停ならどこでも乗降ができるようになった。

閑話休題。件の巻頭言の結びで、村田理事長は「新型コロナウイルス感染症が収束した折には、各地域における Ecological Development をより積極的に進めたいものである。そのためには、いま“巣ごもり”しつつも、地域資源を発見・把握しその活用策を考え、次への確かな準備を行うことが望まれる。」と書かれていた。

振りかえれば、いわゆる「3つの密を避ける」ため、それまでの「常識」がいろいろ覆された3年間であった。ウィズコロナ・アフターコロナ期においてどのような Ecological Development 的地域活動を展開していけば良いのかが見いだせず、「踊り場」にさしかかっている感があった時期もあったが、構想や指針を見直す良い機会でもあった。

2. 移住熱の高まり

吉野町では、2021年度から地域受入協議会(通称:住んでよしのナビ)がスタートしている。

協議会は、それまで空き家バンク(NPO 法人空き家コンシェルジュが運営)が移住希望者へ住まいを仲介するにとどまっていたものを、生活する基盤となる地域社会へうまく橋渡しをする役割を担おうとするものである。



住んでよしのナビツアーの参加者たち

協議会設立の背景は、ここ数年で移住希望者から役場や空き家バンクへの移住相談が急増したことにある。後述の殿川の活性化に取り組もう会もメンバーに加わっている。

2022年度の主な事業として、メンバーである建築士、電気工事が民家のリフォームの際に気をつけたいことをプロの視点から解説し、その後、模型でリフォーム体験をしてもらう「そこが知りたい！吉野で移住&DIY講座」や、町内のいくつかの地区に住む移住者に話を伺う「そこが知りたい！住んでよしのナビツアー Vol.1」を実施した。

2023年度は、移住するには稼ぎ(勤め)が必要との視点で、町内事業者とゲストハウスの協力を得て、お試しワーキングホリデーを実施している。移住希望者は、5日間ゲストハウスで寝泊まりしながら、日中は3日ほど事業者のところで作業することで、マッチングを図ろうとするものである。

3. 若手のゆるやかなネットワーク

2018年1月、大阪国際大学のTゼミ生による提案を受け、地元受け入れ側の「若手」による「殿川の活性化に



トノカツのメンバーたち

取り組もう会(トノカツ)」がスタートした。ここでの「若手」は、企画や運営で動ける人を指す。

その後、コロナ禍に加えゼミ教員の異動もあって、大学生の受け入れは2020年上半期で終了した。そこで、2019年12月、月1回の定例会をリアルやオンラインで開くことにして、近況報告やイベント企画運営の相談を行うことにした。

ところで、2019年7月のことだが、吉野町役場と株式会社SAGOJOが連携し、地域の方と交流しながら、地域の方のちょっとしたお手伝いを2~3時間行うこと(「サゴジョブ」と呼ばれる)で、吉野町上市にあるゲストハウスSの宿泊がただになる仕組みがスタートしている。その仕組みの利用者は「旅人さん」と呼ばれ、吉野の拠点であるTENJIKU吉野の運営事務局担当者が、殿川での作業に「旅人さん」を時折連れてきてくれるようになった。その担当者も、トノカツメンバーとなってきている。

4. とのがわの自然をまるごと体験

この8月5日(土)・6日(日)、「とのがわの自然をまるごと体験」を開催する。トノカツの定番行事となりつつあって今年で2回目となる。

体験の内容は、メンバーそれぞれの生業や技術を持ち寄っており、山椒の収穫体験や吉野杉の端材を使った木工体験、ラジオの製作体験等を行っている。

ところで、奈良県は、2008年7月に奈良県山の日・川の日条例を制



「奈良県山の日・川の日」イベントガイドブック表紙

定し、7月第3月曜日を「奈良県山の日・川の日」としている。そして、7月・8月の2ヶ月間を「山と川の月間」としている。毎年、水資源政策課が県下の山(森林)や川(水辺)など自然に関するイベントの情報をまとめたイベントガイドブックを編集し発行していて、県下の小学生全員に配布されている。トノカツでも昨年度からこの冊子へ体験イベントの情報を掲載してもらい、小学生及びその保護者らを対象としている。



木工体験の様子

そして、「旅人さん」も昨年に引き続いて5人ほど2日間来られ、お手伝いくださることになっている。

5. おわりに

ここまで挙げた以外にも、前回投稿に登場する殿川住宅に2021年12月から人が住むようになった。また、それと前後するように、殿川集落への入口に立つ一軒家を借り受け、トノカツの拠点「トノカツオフィス」とした。

その家は、空いてから6~7年経っており、家財道具もある程度整理されていたのだが、それでも軽トラック13台分の不用品が出たのであった。

ところで、ここ数年、私は、家族の介護、会社の経営と日々の業務に追われ、こうしたトノカツの活動に注力できているとは言いがたい状況が続いていた。その一方で、トノカツメンバー間のコミュニケーションは良好で、自分のできることを会に提供することで無理なく関わってくれており、ゆるやかな役割分担がなされている。

引き続き、Ecological Development 的視点を持ちながら、このトノカツの組織の発展と殿川地域の発展を推し進めていきたいと思う。